

2016年6月  
1102号

# 万葉

Manyo

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

## 『18歳からの投票心得10か条』出版記念パーティー ～石田理事長おめでとうございます！～

石田尊昭尾崎行雄記念財団理事・一冊の会理事長が『18歳からの投票心得10か条』を出版されました。初の18歳選挙権行使を迎える参院選を控え、若者だけではなく、私たちが今一度、読むべき政治や選挙についての重要なエッセンスが詰まっている本です。

6月25日、尾崎行雄記念財団設立60周年記念『18歳からの投票心得10か条』出版記念パーティーが憲政記念館で開催され、一冊の会は全面的に応援させていただきました。日頃から一冊の会に力を尽くして下さっている石田理事長へ、心からのお祝いと感謝をお伝えするため、手料理をパーティー会場に持参して石田理事長にプレゼントすることにし、大槻会長の心づくしの準備は1週間前から始まりました。華やかに見える食器を選び、出版を祝してお料理に立てるための「おめでとうございます」と書いた小さな旗を手作りで準備しました。実際の料理づくりは、食中毒などおこしては大変ですから、当日の夜更け前から始め、メニューは、揚げ物を中心に、煮物やサラダなど7種類の料理を用意しました。



会場に一番乗りし、続々とお祝いの方たちが駆けつける頃には、器への盛り付けも終わり、始まるのを待つばかり。伊勢から「NPO法人罌堂香風」が、相模原から「尾崎行雄を全国に発信する会」が駆けつけて下さり、尾崎罌堂先生の精神を広めていく仲間がいることに勇気をいただきました。この2つの団体には、一冊の会から、尾崎行雄の半生を綴った「尾崎行雄人權紙芝居」上下セットのDVDをお贈りしました。

また、東京都立園芸高校の校長先生が祝辞の中で、101年前に桜の返礼でもらったハナミズキの原木の最後の1本を、プロの技で本来60年程度が寿命であるハナミズキを今でも大切に育てているとおっしゃっており、本当に様々なところに尾崎罌堂先生の足跡が刻まれているのだと感心いたしました。

来賓挨拶の最後は一冊の会大槻会長です。「1人1人がそれぞれに石田理事長にお祝いを言いたくてたまらないので」との前置きの後、皆で一斉に「おめでとうございます」と申し上げました。

最後に、著者である石田理事長のスピーチ。この本は投票率の向上だけを念頭に置いている訳ではなく、数よりも、むしろ有権者における投票の「質」を高めなくてはいけないこと、尾崎行雄は「国の存続・繁栄と国民の幸福」という目的のために行動し、2つのフセン——「普選」「不戦」は、あくまで手段であることなど、言葉の1つ1つに、改めて、しっかり自分の頭で考えて一票を投じなければならないと、特に参院選前の時期ですので、強く心に刻みました。また、3つめのフセン——特製の付箋が参加者には配られるという、嬉しいおまけ付きでした。

後半は懇親会。一冊の会手作りの料理は会員の手で次々とテーブルに並べ、罌堂香風が伊勢から持ってきてくださったお菓子もあわせて会場は一気に和やかな雰囲気になりました。様々な方から祝辞をいただき息つく暇もない石田理事長でしたが、一息ついたところで時間を作ってくださり、佐藤啓太郎大使夫人、INPS（インター

ナショナル・プレス・シンジケート) Japan の朝霧勝浩理事長と一冊の会メンバーにて記念撮影をし、パーティーの成功を皆で喜びました。

パーティー参加者には、『18歳からの投票心得10カ条』が1冊ずつプレゼントされ、終了後に拝読させていただきました。本の最初の文章は、「民主主義と“格闘”しよう」です。石田理事著は、議論し、葛藤し、3度目の選挙を迎えた時に、自分自身の「政治的意思」を持って選挙に行けたと書かれていました。私は、毎回選挙を迎える度に真剣に考えてはいましたが、「格闘する」という言葉遣いができる程に議論や葛藤は重ねて来なかったと反省いたしました。



私達は、先人が築いてくれた平和な世の中で、選挙権を持つことができました。選挙をするということが当たり前ではないことは、独立したばかりの東ティモールで活動していた保健系NNGOの見学に行った時に、「選挙に行って家を空けている間に、家が壊されてしまった」と現地の方から聞いた時に感じたのですが、民主主義の本質についてはその時には深く考えなかった事を反省しております。

折しも、この万葉を書いている間に、イギリスでEU離脱の国民投票結果が出て、世界が騒然としています。45ページで「民主主義は、選んだ有権者の責任が問われる厳しいシステムと言える」と石田理事長は書かれており、この

言葉の重みを噛みしめて、次の参院選に向けて「格闘」します。

また、参院選当日は、私は投票所の職員として、皆さまの投じた1票が間違えなくカウントされるようにも「格闘」している予定です。選挙の度にたくさんの方が働き、それだけのお金と労力もかかります。民主主義にはそれだけのコストがかかっているということです。そのことも併せて考えながら、しっかりと「格闘」して参ります。



文責：大槻、小山、赤田